

文学は教育に不要か？

——大江健三郎「他人の足」を用いた教科横断型授業の実践

前 田 健 太

(共同研究者) 前 田 圭 介

1. はじめに

「現代文と倫理の授業をリンクさせることはできないか？」という恐るべき提案が、前田圭介先生（以下、敬称略）よりなされた。かねてより他教科と連携して、より効果的な授業が行えないかと思索していたようである。筆者が二〇二〇年度の現代文を担当している三クラスのうち、二クラスの二〇一九年度の倫理の担当が前田圭介であり、生徒の様子をよく知っていること、また、筆者とは出身高校が同じであることなど（大胆な提案に人間関係は重要である）からご提案いただいた。その後、打ち合わせを重ね、お互いの授業連携に対するイメージを確認し、いくつかの教材を示しあい、授業計画を練っていった（後に詳述するが、本授業実践にあたり、特に石川巧「カリエスの亜空間——大江健三郎「他人の足」論——」を参考にした）。

前田圭介からは、公民科としての立場からも、ますます複雑化していく現代社会の諸問題を考察する力を養いたい

という意見が示された。そのためには、従来の教科の枠組みを越えた横断的な授業実践が有効である。倫理で扱われるような現代社会の諸問題について論じた評論作品や文学作品は数多く存在し、それらを現代文の授業で題材とすれば、時代を問わず「当時、そもそも何が問題だったのか？」と、生徒が問題を発見するところからはじめることができ（もちろん、ある程度の誘導は必要となる）、また、現代文・倫理のそれぞれの観点から考察を深めることにより、一つの問題に対して様々なアプローチをする重要性・面白さを体感することができる。

筆者としては、平成三〇年告示の新学習指導要領が念頭にあった。新しく提示された国語科の枠組みでは「評論」と「小説」を明瞭に分割することが求められ、前者は「論理」、後者は「感性」を養うべきものとされているようだ。また、取得する単位の構成については各学校の裁量に任せているようにみえるものの、「論理国語」「文学国語」それぞれが四単位となれば、同時に選択することはまず不可能で、大学受験における利便性を考えると「論理国語」を選択するのが当然となる（新学習指導要領は高校ではまだ実施されておらず、実際のどのような選択がなされるかは不透明であるが、本校の教員はもとより、オンラインで実施された研究会などで他校の教員に意見をきいても、このような教科選択が主流になると考えている方が多い）。高校二年生以降では、小説は読んではいけないのだ、と示しているようなもので、全く意味がわからない。小説家は論理でなしに感性でもってなんとなく小説が書いてしまい、読者はぼんやりと小説を眺め、感動しているとしても考えているのだろうか？ また、人間の営みを「文化」とよぶならば、「文化」を一般的な現象に即して抽象化したものが評論である一方、それぞれの人間に即して具体的に表現したものが文学であるはずで、それらの相互的な理解こそが「文化」の理解につながる。もし社会が複雑化し、現状の方法に不足が生じるというのなら、議論すべきは評論と文学をいかに連関させ、社会を分析・理解するための読解力身につけさせるかという点にあるはずで、両者を分断しようという試みは、現実逃避の退行現象に過ぎない。新学習指導要領に対する反発は、例えば二〇一九年九月号の『文學界』で大規模な特集が組まれ、現在も紅野謙介らの旺盛な

執筆活動によってなされているが「諦めムード」とでもいうべきものが漂っているように思う。しかしそれでは、ほんとうに「文学は教育に不要である」とラベルを貼られてしまう。筆者は、自身も大学・大学院で創作技術を主たるテーマとして文学研究を行い、その成果を、文学の特性を活かした授業を通じて生徒に還元していくことで、高度な思考力を養ってほしいと考えている人間であり、前田圭介からの提案は、いま一度、文学の教育上の有用性を新たな視点から捉える絶好の機会となると考えた。徐々に軽視されていく文学が、まさに「改訂の経緯」にある「多様性を原動力とし、質的な豊かさを伴った個人と社会の成長につながる新たな価値を生み出す」こと、「様々な情報を見極め、知識の概念的な理解を実現し、情報を再構成するなどして新たな価値につなげていくこと、複雑な状況変化の中で目的を再構築することができるようにする」ことにどれだけ寄与するか、本実践を通じて十全に示していきたい、また教育に「自由」が担保されているうちに。

2・授業計画とその目的・意図

本実践は、二〇二〇年度三学期に早稲田大学高等学院二年生の三クラスを対象に行なった。一クラスについては前田圭介の授業を受けたことがなく、他の二クラスに比べると本実践に抵抗があつたかもしれないが、授業時の様子、また成績に関して大きな差はみられなかった。本章では、授業計画を示したうえで、教材の選定および授業の目的・意図について述べる。また、高校の教材としては必ずしも一般的ではない『日本近代文学の起源 原本』や大江健三郎の作品を選定した理由についても詳しく述べておきたい。具体的な授業内容については次章で述べる。

なお、早稲田大学高等学院は早稲田大学附属の中高一貫校で男子校。中学は一学年一二〇人程度、高校から三六〇人程度が入学し、計四八〇人程度。卒業をした者はほぼ全員早稲田大学に進学する。高校では三年間クラス替えはな

し。高校一年次の現代文担当教員はそれぞれのクラスで異なるため、一年次の学習内容はあまり前提とせず、二年次の授業を行っている。筆者は本年度、一学期に中島敦「山月記」、E・H・カー『歴史とは何か』からの抜粋、二期に太宰治『斜陽』全体を扱った。また、新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、本来五〇分の授業を四〇分に短縮している。

【授業計画】（全九時間）

- ① 三学期授業のオリエンテーション（一時間分）
- ② 柄谷行人「病という意味」についての解説（四時間分）
- ③ 大江健三郎「他人の足」についての読解（二時間分）
- ④ 前田圭介による動画授業（一時間分） ※④以外は筆者が担当した
- ⑤ 「他人の足」の終盤を中心とした今学期のまとめ（一時間分）

【①～②】（二時間分）

今学期で扱う二作品を示し、その二作品を選んだ意図を伝えた。学習の意義は生徒それぞれが考えるべきだという意見が主流だと思うが、本校の生徒は概して知的好奇心が高く、また大学の附属校であるということもあり、いま学んでいる内容を将来の学部・進路選択にどのように活かせるか模索しながら授業に臨んでいる生徒も多いため、筆者は新しい項目に入るたびに、その意図を生徒に伝えている。

【②】(ついで) (四時間分)

柄谷行人「病という意味」は一九七九年に『季刊藝術』夏号に発表された。『日本近代文学の起源 原本』に収められたいずれの評論も、文学と社会との接続を意識した鋭い批評性をもっているが、「病という意味」は文学作品を多く読んでいない生徒にも比較的わかりやすい内容・論理展開である。

「病という意味」については、「たとえ本文中の専門的な用語・具体的な事例について事前に詳細な知識がなくとも、丁寧に読んでいくことで筆者の主張を掴むことができる」「それさえ掴めれば、くり返し読むことでそれぞれの用語・事例の評論全体での意義に気付くことができ、さらに深い理解ができる」という方針をオリエンテーションの際に述べた。一言で云えば、その作品に入り込むことができるかどうか。難しい、と思つて拒絶するのではなく、少しでもわかることを有機的に関連させれば、全体像がみえる。特に評論作品は、一読した限りではほとんどわからない程度(「全く」ではないことが重要)が難度として適切である。

生徒に事前に伝えていない意図としては、まさに本実践時に世界的な困難として現れている「新型コロナウイルス」について考えることに大きく寄与する、ということがある。柄谷行人は「病という意味」において「結核」を中心的な話題としているが、特に結核の症状や特性が、結核が本来もたない「意味」を生みだし、その「意味」が「感染」していく過程を説明している。結果的に本実践では「病という意味」の考え方がコロナ禍にどう活かせるか詳説することはできなかったが、生徒それぞれが「病」について考えを深めてくれたことを期待したい。

もう一つ、特にメディアにおいて、「病」に特別な意味が付与されている現状について気付かせるねらいがあった。「24時間テレビ」などの長時間特番がその好例であるが、ある属性をもつ人々を取り上げ、過剰に特別視し、「差別をなくそう」と訴えることが、むしろ差別を固定化させることを生徒に理解させたい。

以上のように、生徒の知的好奇心を授業者が的確に把握したうえで、(1)生徒がその作品を読み、理解すること

に達成感が得られる難度のものを選ぶこと、(2) その評論を読むことがすなわち現代社会の問題について理解を深めることにつながることを、の二点が重要であると考え、本実践では「病という意味」を選んだ。

【③JUNJUN】(二時間分)

大江健三郎「他人の足」は一九五七年に『新潮』八月号に発表された。「奇妙な仕事」の直後に発表され、芥川賞を受賞した「飼育」に並ぶ初期作品群のうちの一作である。新潮文庫版で二六ページと授業で扱いやすい長さで、「外部からやってきた学生」と「内部に留まりつづける「僕」を含む脊椎カリエス患者」という構造が明快で、難解な表現も含むものの、展開がはつきりしていて生徒も読みやすい。

「他人の足」については、オリエンテーションで以下の二点について述べた。一点目は「現代文」という教科はその名称に反し、ほとんど「現代」といえる時期の作品を扱っておらず、またわずかに教科書に載っている現代の作品は必ずしも評価の高い作品ではなく、自国の文化への理解を深めることを通じて国際社会を理解していくためにも、国際的な評価が高い作家の作品を読むことには大きな意味があり、「ノーベル賞」というわかりやすい指標をもつ大江健三郎の作品はその目的に合う、ということである。二点目は、そのなかでなぜ「他人の足」を扱うのかということであり、「病という意味」で得られた知見を活かしやすいこと、現代的な社会問題に通じる部分が多くあることを述べた。ただし、生徒の関心を限定しないため、どのような問題を含んでいるか詳説することは避けた。

授業内では詳しく述べなかつたが、作品の現代性についても少し述べたい。例えば高校一年次の定番教材である芥川龍之介「羅生門」や高校二年次の中島敦「山月記」は、非常に短い作品ながら独自の作品世界を創りだし、描写も巧みであり、構成も非常に練られ、発想のもととなった作品が存在する(「羅生門」は「今昔物語集」、「山月記」は「人虎伝」等)。「教科書を学ぶ」のではなく、「教科書で学ぶ」という目的において、これほどの作品は滅多にない。

しかしながら「羅生門」の初出は一九一五年（広く教科書に採択されているのは一九一八年に春陽堂より発行された版）、「山月記」は一九四二年といずれも戦前の作品であり、生徒にとって「過去の作品である」という感覚は拭えない。また「羅生門」や「山月記」といった作品は、古典作品を材としているため、どうしても現代的な社会問題と結びつけることが難しい。

無論、不可能だと云っているわけではなく、筆者自身も試行錯誤を重ねている。けれど、文学作品は社会と全く関係がなく、独立して存在しているとも思われている現状を打破するには、明確に社会的な問題を扱った作品を用いることが重要である。今回は、国際的な評価が定まった作家の作品であること、ある程度研究がなされている作品であることを鑑み、「他人の足」を選んだ。今後も教材開発をすすめ、より適切な作品を探究していきたい。

このことにも関連するが、現代文という教科は、旧学習指導要領においても、新学習指導要領においても、読書活動につながるものでなければならぬことが強調されている。しかしながら、やはり「羅生門」や「山月記」は読書活動につながりづらいだろう。「他人の足」は確かに難解であり、差別的とみなされる表現も多く含むため、教材としての取り扱いには細心の注意が必要である。ただ、その分生徒に与えるインパクトも大きい。作品全体を覆う不気味な雰囲気。「僕」と学生の論争。そして足が治った学生と「僕」たちとの決定的な決裂。3章で生徒の反応を紹介するが、「他人の足」を面白いと感じた生徒は多く、大江健三郎のおすすめの作品を紹介してほしいという声もあった。あまり本を読まない生徒も文学の面白さを感じやすい作品を、積極的に扱うべきだと考えている。

【④】(二時間分) ※前田圭介担当

本実践で「他人の足」を選択したもう一つの理由は、教科横断型の授業に接続しやすいことである。「他人の足」は社会学や倫理学における様々な問題を含んでいる作品だが、今回は特に病者のアイデンティティに関する問題と身

体性をめぐる問題の二点に絞って掘り下げた。例えば、社会学では障害者運動における当事者のアイデンティティに注目する研究があり、一九七〇年代には「障害者」であることを肯定し、あえて健常者との差異を強調するような障害者運動の動きが見られたが、今回の「他人の足」は一九五七年の作品であり、こうした障害者運動の動きに先行して当事者のアイデンティティの問題に踏み込んでいる。このように、現代文の授業ではあまり語られないような論点を提示することによって、「他人の足」という文学作品が投げかけるテーマの重要性に気づかせるような構成とした。

【⑤】(二時間分)

④の授業で特に丁寧に説明した「他人の足」の終盤を中心に、前田圭介とは異なる観点からの読解を示した。目的・意図については、これまで述べてきたことと重複するため割愛する。

3・授業実践

この章では、2章で示した目的・意図に基づいて行った授業実践について述べる。なお、①～⑤の数字は、2章に対応している。

【①】(二時間目)

冬期休暇課題にまつわる活動をしたあと、「病という意味」「他人の足」を扱う意図を説明した。また「病という意味」を配布し、わからない部分があっても通読してくることを宿題として提示した。

【2020年】(一)五時間目

筆者が冒頭から音読しながら、わかりづらい指示語が示す事柄を述べたり、専門的な用語について身近な具体例をあげながら説明したり、といった解説を主として行った。

また、冒頭の「七里ヶ浜事件」について概説したあと、「病という意味」全体を通じての筆者の主張を大まかに述べることにより、その後の「結核」にまつわる記述が意味することを理解しやすくなるように留意した。その主張とは、ある事実について語るとき、事実の俗悪な部分を隠蔽することで、事実全体を感傷的な「文学」に変形することが可能であり、その結果様々な危険性を生じさせてしまう、ということである。

この主張を前提として、中心的テーマである「結核」に関してまとめると以下のようなことになる。結核は、流行した当初は不治の病であり、病に侵された者は非常に大きな苦しみを伴った。そのことが文学作品で故意に隠蔽され、結核患者が病み衰えた様を妖しい美しさをもつたものとして描き、徐々にそれが人々に受け入れられていく。すると結核が「上品で、繊細で、感受性の豊かなことの指標」であるという、本来ならあり得ない意味をもってしまうのだ。すると当然、自ら結核に感染したがる者も現れる。

この点について考えれば、いわゆる「コロナパティ」が催された新型コロナウイルスの状況と非常に似ている。今後、新型コロナウイルスが生んだ様々な「意味」が研究されていくことと思うが、すくなくとも「新型コロナウイルスの感染予防をしない」ということが「勇気がある・物事に動じない」ことの指標となり、また感染を乗り越えたことが「強い人間」であるかのような考え方がトランプ大統領を筆頭に一部の人々のあいだで広まったことは確かである(なお、メディアに大きく取りあげられた「コロナパティ」としては二〇二〇年七月にテキサス州で行われ、感染した男性が死亡したものが有名だが、この事例については情報源が不確かであるとし、存在が疑問視されている)。

あわせて、「24時間テレビ」における、障害をもつ子供たちが集められ、無理難題に無理矢理挑戦させられ、それ

をみた演者が泣く(まさに「演者」である)という構図を示し、「病気をもつ」者が、健常者の側から一方的に「かわいそうな立場にいるけれど一生懸命努力している」「あらゆる困難を乗り越えることができる」と教えてくれる」といった「意味」を付与されている現実を述べるなど、一九七九年に書かれた「病という意味」が、現代社会の問題点を鋭く指摘しているという点は強調した(ただ、生徒のレベルが高いこともあり、こういった演出への違和感はその生徒がもっていたようである)。

また、五時間目の最後に「他人の足」および予習プリントを配布し、「他人の足」を読み、予習プリントに記入することを宿題とした。

【③ついで】(六・七時間目)

(一) 予習プリント

六時間目の授業開始時に予習プリントを回収した。予習プリントの項目は以下である。その項目を設定した意図を述べ、生徒の反応を記したあと、簡潔にコメントを付す。なお、少々分量が多くなるが、「他人の足」を扱う意義を確認するためにも、内容が重複しないよう配慮し、可能な限り記載している。また、表記は生徒のものに準じた。

- (一) 作品を「おもしろい・ややおもしろい・ややつまらない・つまらない」の四段階で評価し、その理由を書け。
- (二) もしこの作品でレポートを書くとしたら、そのテーマと、論じる内容・方法の概略を述べよ。
- (三) もしこの作品で教員として授業をやるとしたら、どのような手順をとるか、概要を述べよ。
- (四) 疑問・質問があれば自由に述べよ。

(一) 生徒に主体的な読みを促すため、小説・評論に関わらず、この項目は必ず設けている。生徒に作品がどのような受け止められているか知ることは授業の進行にあたり大きなプラスであるし、なかには筆者も気づけなかったような重要な指摘もある。また「つまらない」という評価も当然尊重し、その理由も授業内で紹介している。授業を通じて「おもしろい」と感じてもらえるのが理想ではあるが、肯定的な感想を強要するような雰囲気は注意深く避けなくてはならない。

「全体の構成をふまえたもの」

・評価：おもしろい／理由：様々な面で二元論的な構図が展開されており、主人公が二元論の一方に偏っている、閉鎖的な存在であることが誇張されていて、考えながら読めたから。「内界(自己)」対「外界(他人)」、「反抗」対「同調」、「不随」対「恚意」、「集団」対「個人」

・評価：おもしろい／理由：良い意味でも悪い意味でも組織の内を変えようと思っている人物が一人称で書かれているのではなく、他人目線で否定的に捉えられているところが新鮮であり、「僕」は逆により現実味のある考え方であったから。

↓初読の段階で非常に精緻な読解を達成している。このような生徒は評価を「おもしろい」としている場合が多く、作品への理解と評価が、ある程度相互に関連していることを示す結果だと思う。

・評価：ややおもしろい／理由：まず、この話の設定がおもしろいと思った。下半身の動かない子供たちと看護婦、そしてそこで作られた一つの社会、それをこわす学生、また学生の心の変化と僕の心の変化の可能性、子供たちの心情と看護婦による衛生維持のための快樂など沢山の関係性があり、おもしろかった。

↓作品の特徴的な点について理解できており、このような生徒が、すでに理解できていることをくり返され、退屈に感じてしまう授業にならないことを目指していきたい。

「性的な要素に関するもの」

・評価：おもしろい／理由：途中性的な描写が何度もなされていたが、それに対して気持ち悪さを一切感じさせず、美しさすら感じさせられる大江健三郎の表現力には感嘆した。

・評価：ややつまらない／理由：性欲の話になるのが嫌だった。

↓性的な要素を描いていることについて肯定的に捉えている生徒と否定的に捉えている生徒は半々であった。嫌悪感を抱くというのは通常の反応であるが、授業者は、そのような生徒に作品を拒絶するのではなく、大江が小説に性的な要素を多く取り入れているのはなぜかと考えさせることを促すよう工夫したい。

「作品の外部と結びつけているもの」

・評価：おもしろい／理由：充実した監禁生活の中で突然現れた左翼的な学生が『日本近代文学の起源』における結核の病原体の話と同じように「超越的な存在」として認識されているのではないかと感じ、面白かった。

・評価：おもしろい／理由：脊椎カリエスの病人達が病院の中で小さなグループを形成し、同じ病気の人はそのグループの一員とするのが病気が治ったとたんにグループから追放することが社会の縮図のように思えたから。

↓すでに扱った教材や、社会的な構図に着目している生徒も若干名いた。教材選定の意図についてはすでに述べたが、その作品の内部だけで読解を完結させるのではなく、様々な評論・社会的な事象に結びつけられることは強調したい。

「その他」

・評価：おもしろい／理由：（冒頭の描写から）刑務所での話かと思つたが、脊椎カリエス患者の話であつた。

・評価：ややおもしろい／理由：本来、名前はその人を特徴づける要素の一つであるはずだが、それが今回は異質な存在とされて描き出されているという点では、ある種恐ろしささえ感じた。

・評価：ややおもしろい／理由：「僕」が冷淡であるのに対し、「学生」は改革に情熱的である。二人の会話がアンバランスで滑稽だから。

・評価：ややおもしろい／理由：青年が回復した自分の足がさつきまでとは同じでない全く別の「他人の足」になつてしまう。

・評価：ややおもしろい／理由：自分にはないものを前にすると、生き方全てを曝け出し、どんなに目を背けてもそれは必ず返つてくるという人間の醜い本質のようなものに身が竦む思いをしました。周囲が無音になる読後感でした。↓作品の雰囲気を的確な言葉で表現したり、作品の重要な要素を指摘したりしている生徒は多かつた。特に三番目の生徒の「二人の会話がアンバランスで滑稽だから」という感覚は大切だ。どうしても小説作品、特に授業で扱う作品に対し、身構えてしまう生徒は多い。「文学」を過度に高尚なものと捉えず、素直にたのしんでいく姿勢を授業者としても示していきたい。

(二) (二)と同様、生徒に主体的な読みを促すとともに、本校の場合は卒業論文も見据え、現代文以外の教科でも活かせるような、対象に疑問をもつ姿勢、魅力的なテーマ設定ができる力につなげたい。

「障害に関するもの」

・テーマ：健全者と障害者の平等／内容・方法：男女の平等など、平等が全世界で叫ばれているなかで、この作中においてもその難しさがあらわれている。はじめ、障害者は、自分たちが劣っていると受け止め、ナースたちからもさげすまれているような格好だった。しかし、学生がきた後、声を上げるようになると「障害者」だから、積極的に取り上げられるようになった。ここに平等は存在しているのか。平等はどこまでのバランスのことをいうのか。そんな倫理観の問題をさまざまな世界の事象とともに考察する。

・テーマ：障害者の偶像化／内容・方法：脊椎カリエスであるがために「学生」たちの運動が社会から注目されるが、それは社会が障害者を普通の人として見ていない、あるいは一種のマスコットのなものと見ていると考えられる。

・テーマ：「内」と「外」／内容・方法：身体的な障害という「外」のことが主人公の精神という「内」の部分に影響していることを示す。

↓「病という意味」もふまえているのか、鋭い着眼点をもち、普遍的なテーマに結びつけることに成功している。特に一番目の生徒の洞察は深い。くり返しになるが、小説作品が社会的な問題と強く結びついて点については強調していきたい。

「社会性に関するもの」

・テーマ：「他人の足」における人の交流／内容・方法：確かに人は「交流」しなければ生きていけないが、「社会的」である必要はあるのだろうかということだ。

・テーマ：この作品における「学生」について／内容・方法：外界から遮断された環境に入ってきた学生がそのような状態を動いて変えようと光を差し込むことに成功したにも関わらず、彼が外界に出る際には強硬な姿勢になるとい

う点が、現代社会、特に国際問題において共通性がある。

↓「障害」について過度に意識せず、一般的な人間の交流についてテーマ設定をしている。授業準備の段階でどうしても「障害」について意識した読みをしまつていたが、このような生徒たちの感覚も大切にしていきたい。

「その他」

・テーマ：「笑い」の変化／内容・方法：本文では「笑い」に対する描写が数多く存在し、しかもその「笑い」は各場面において異なった特徴をもっている。

↓この他にも作品全体を広く読み、細かな表現に着目できている生徒が多くいた。内容だけでなく、表現それ自体についての考察も促していきたい。

(三) 補足的な項目ではあるが、生徒が授業をどのようなものとして捉えているか知るとは、教員にとって授業を見つめ直すきっかけともなる。この項では各提案にコメントを付さないが、参考のため掲載する。

- ・はじめの四行だけ読ませて、この話はこういったものなのかを想像させてから進める。
- ・それぞれの立場の人物が別の選択肢を取れなかったのか考察。
- ・大江健三郎の書いた他の作品との共通点を探し、彼の描こうとしたテーマを考える。
- ・(主題や比喩表現について分析した後) 主な登場人物にとつての「正常さ」とは何か、考えさせる。
- ・内と外などの対比部分やある程度内容を抑えた上で、例えば「幸福とは何か」といったテーマで考えさせる授業を行うと思う。

(四) 疑問を書かせることは結果として主体的な読みにもつながるし、不可解な点への自覚が魅力的なテーマ設定につながることも多い。授業者が意識していなかった、生徒にとって難解な点が明確になり、授業をするうえでも大きく参考になる。

「性的な要素に関するもの」

・性的な描写にはどのような意味があるのだろうか？
・性差などセンチティブな話や、読者によって性的だったりグロ表現と受け取られてしまうような内容などが作品を受けとる上で障壁となってしまう場合の対処法はあるのか。

↓二番目の生徒は「クラスメートの多くがこの作品について「ひたすら気持ち悪い」という印象をもっていたことに驚いた」とも書いており、授業後、筆者にこの点について質問をしてきた。これまでもそれぞれの教材に深い洞察をみせてきた生徒である。地道に表現の可能性を示していくしかない、というようなことを述べたが、筆者としても今後この点については考えを深めていくべきだと感じた。

「登場人物に関するもの」

- ・「僕」が最初学生運動をみて苛立ちながらもその運動をしつかりみているのはどのような心情なのか。
- ・学生はもう歩けないはずだったのにどのように回復したのだろうか。
- ※本人による解答案「学生は病棟の中で独自性を得たことよって完治したと結論づける」
- ・看護婦は複数人登場して見分けがつかないが「看護婦達」という単一のくくりでみるべきなのか。
- ・どこで拍手を覚えた？

↓それぞれ独自の視点で「他人の足」を読解していく可能性を秘めている。二番目の生徒の「独自性」という観点は意義深く、三番目の生徒の「看護婦達」という表現とも対をなしている。四番目の生徒について、患者である子供たちは脊椎カリエスに罹患する前は病棟の外で暮らしていただろうから、そこで拍手を知る機会はずだが、足に障害をもつ患者たちの「拍手」という行為は確かに示唆的である。

「読書に関するもの」

・この話はとても面白かったので大江健三郎の作品で他におすすめのものを教えてほしい。

↓「他人の足」をきっかけに他の大江作品も読みたいという声もいくつもあった。(一)で評価を「おもしろい」としていた生徒も多く、教材を通じて生徒の感性を刺激できたことは大きな収穫である。

「その他」

・描かれた当時の時代背景の説明をお願いしたい。

↓素直な質問ではあるが、作品外部の情報から作品を深く読もうという姿勢は、非常に重要である。

(2) 授業展開

六・七時間目は「他人の足」におけるわかりづらい表現、「脊椎カリエス」をはじめとした知識事項の説明をしながら、筆者が音読した。その際、読解にあたり重要な部分を指摘し、ある程度の分量を読んだ後、板書を用いて整理する、という解説を主に行なった。なお、本授業は生徒の通読を前提としているため、難解な部分がない箇所は音読せず、その場面の概要や特に注意すべき表現について説明するにとどめた。筆者は特に小説作品を扱う際、テンポが

重要だと考えている。すべての箇所を丁寧に説明しては、作品の「流れ」が分断され、単なる情報の集積となってしまうからだ。作品本来の面白さを損なわないよう注意したい。また、七時間目の授業では、六時間目に生徒から回収した予習プリントの内容や疑問点をふまえて解説するよう留意した。

なお、解説にあたっては、石川巧「カリエスの亜空間——大江健三郎「他人の足」論——」を参考とした。石川論文を活かして説明した内容を以下に記す。

・冒頭の「粘液質の厚い壁」とは、患者たちの反発を招くような「実体としての壁」ではなく、看護婦たちの「濡れてぶよぶよしている唇」という表現を喚起させるような、緩やかに生気を削いでいく構造を示している。またその過程として「手軽な快楽」が重要な役割をもつ。

・序盤における「僕ら」という言葉のくり返しにより、「僕」と「他人」を区別する境界線を取り払い、それぞれが「主体性を喪失している」ことを表現している。

・学生による《世界を知る会》は「自分の〈内部〉に問題を引き受けることをしないまま、破綻しない程度の自己主張を続ける足場だけは確保しようとするバランス感覚」の表れであり、実質的な〈外部〉とのつながりを目指すものではない。（※この部分については九時間目に解説した）

これらのことを説明しながら、他に、主に以下のことについて述べた。

・くり返される性的な表現に対し、読者が嫌悪感をもつことは全くおかしいことではないが、性的な要素は生活のなかで重要な位置を占めているにも関わらず、多くの作品において捨象されてしまうのはなぜだろうか。また、性的な

要素を作品に取り入れた大江の意図を考えたい。

・作品全体を通じて「笑い」について言及されており、冗談に対して患者たちが「忍び笑い」する一方、学生は少年によって「変な奴だよ、笑わねえんだ」と揶揄される。しかし投書が新聞記事に掲載された際には「快活な笑い」がサランームを満たすようになる。「笑い」の様子が患者たちの精神性と連動しており、また「笑い」によって仲間意識が確認されている。

・柄谷行人「病という意味」で述べたことにも関連するが、看護婦たちは「清潔」という言葉を振りかざして性的な抑圧を行うだけでなく、職務上の情性ではあるものの、患者たちとの相互的な理解を目指さずに、一方的に〈健康〉な身体を手に入れるべきだと論じている。

時間の都合上、はやいペースで音読、解説を行なったが、予習プリントのために生徒それぞれが丁寧に本文を読んでいたこともあつてか、スムーズに理解できていた様子だった。クラスにより多少差はあつたが、おおよそ《世界を知る会》が結成される場面の直前まで解説をすすめた。授業の最後に、次回が動画授業であることを告知した。

【④JUNJUN】(八時間目)

本来であれば通常の授業と同様に、前田圭介がコマ分の対面授業を実施する予定であつたが、授業短縮の影響や授業回数の不足などにより、動画で配信を行う形をとった。ライブ配信ではなく、PowerPointを用いて画面左下に本人の顔を映し、録画したものをMoodleを介して視聴させた。高等学院ではこれまでもMoodleを利用したオンライン授業を利用しており、生徒としては特に抵抗なく動画授業を受講できる環境にあつたことを付け加えておく。

以下のような展開で授業を行った。

(一) 病と自己認識

・正岡子規『病牀六尺』からの引用を参照しながら、病者にとつての「病」の意味について論じた。なお、『病牀六尺』は「病という意味」でも引用が行われており、結核に本来あり得ない意味を付与せず、率直に結核の苦しみを「写生」したものであることをすでに筆者から説明したが、以下の部分をヒントに、倫理学的観点から病と自己認識について考察を深めた。

○足あり、仁王の足の如し。足あり、他人の足の如し。足あり、大磐石の如し。僅に指頭を以てこの脚頭に触るれば天地振動、草木号泣、女カ（※女偏に尙）氏未だこの足を断じ去つて、五色の石を作らず。

（正岡子規『病牀六尺』百二十五）

・「学生はなぜ運動に熱心だったのか?」「なぜ「僕ら」という人称が多用されているのか?」といった「他人の足」の表現に着目しつつ、病者による「連帯」が病の経験を乗り越えるための一つの手段となってきたことを解説した。

・岸政彦『断片的なもの社会学』を参照しながら、病者を病者としてラベリングしてしまう社会の眼差しの危険性に触れ、病者自身がラベリングを乗り越える可能性について説明する。そのうえで、脳性麻痺患者によって設立された「青い芝の会」の行動綱領を紹介し、実際に行われていた病者の「連帯」について解説した。

・予習プリントの段階で「患者の封じ込めの是非」に関心を持った生徒がいたことを踏まえ、ゴフマン『アサイラム』を紹介し、「全制的施設」としての病院がいかに人間性を剥奪してきたかという問題に少しだけ言及した。

(2) 身体の現象学

・「他人の足」の終盤で、学生の足が治り、その足を触ろうとした少年を拒絶したことで、これまでの関係性が一気に崩れてしまうという以下の部分を引用し、「他人の足に触れる」ということがどのような行いであるか考察した。この場面については予習プリントの段階で注目していた生徒も多く、「倫理学」を通じて文学作品を読解することで、また別の解釈が可能となることを示したい。

ね、君の足に触らせてくれないか。

学生は意識した快活さで少年に躰をよせた。少年は、最初指で学生の腿にふれ、それから静かに両掌でそれを支え、こすりつけた。僕は少年が口を半ば開き、目を瞑って熱っぽい息を吐いているのを見た。

急に身体を引き、邪慳な声で学生がいった。

よしてくれよ、よせつたら。

・ここで注目したのが、「さわる」と「ふれる」の違いに注目した伊藤亜紗『手の倫理』の記述である。特に「さわる」は一方的なのに対して、「ふれる」は双方向的なのだ。「ふれる」には、まさに「ふれあい」と言うように、ふれる側とふられる側の感情的交流がある」という部分を強調し、一見するとわかりづらい、大江の「さわる（本文では「触る」と「ふれる」の無意識的な使い分けについて説明した。すなわち、少年の「触らせてくれないか」という発言は、自分にとって奇異であり、憧れでもある健康な足に触りたいという一方的な欲求を示している。しかしいざ学生が、少年が「触り」やすいように気遣い、躰をよせると、少年は緊張からか足に「ふれ」る。この時点では

相互の感情的な「ふれあい」を感じさせる。けれど少年の欲望は強く、性的な様相まで呈し、必死に足を「触る」。すると少年の欲求に耐えられなくなった学生は少年を拒絶し、患者たちと学生の関係は決定的に瓦解するのである。

・そのうえで、西洋哲学における「まなざしの倫理」（他者との関係性を視覚中心で捉える）、「手の倫理」（他者との関係性を触覚中心で捉える）の対比を行い、従来の哲学・倫理学では「手の倫理」が劣位に置かれてきたことを解説した。しかし触覚には、他の感覚にはない特徴として、主体と客体がその都度入れ替わるという「対称性」があり、メルロ・ポンティなど身体性を重視する一部の哲学者はこうした触覚の相互性を重視していた。相互反転性があるからこそ、伊藤亜紗の述べる「ふれあい」が生じ得るのだといえる。

・時間の都合上詳細な説明はできなかったが、理性的な上半身と非理性的な下半身、介護と「シモの世話」、手足が写らないオンライン授業での理性的・伝達的なコミュニケーションの可能性について最後に若干の言及を行った。

【920分】（九時間目）

④の社会学・倫理学上の観点を踏まえ、最後にまとめを行った。また、時間が不足する心配があったため、板書を書きながら説明する方式ではなく、要点をまとめたプリントを配布し、本文と照らしあわせながら説明を行った。

特に④の授業と関連する部分について、以下に整理する。

・学生が「正常さの感覚」をとりもどすべきだと訴える一方、「僕」は自分たちが「正常でない」と云っている。身体（および身体がもつ障害）と精神は結びつけられるべきではなく、「障害者」というラベルを剥がすべきだと学生

が考えているのに対し、「僕」は「障害者」というラベルを自ら固定化し、自分たちの存在を規定してしまっている。その後、新聞に学生たちのグループの投書が載り、喜んでいる様子をみて「僕」は自嘲的に嘲ったものの「自分の言葉に、最も激しく絶望的に腹を立てていたのは僕自身なのだ」とある。これは「僕」自身も「障害者」というラベルから逃れようという希望の現れである。(※「病と自己認識」で扱った『断片的なものの社会学』に関連)

・足の治った学生を僕がみたとき「自分の足の上に立っている人間は、なぜ非人間的に見えるのだろうか」という思いを抱いている。これは自分の意のままに動かない「足」を人間という存在から切り離して考えてしまっているとともに、「自分の足の上に立」つということが、自分のなかで受け入れられないことを示している。(※「病と自己認識」で扱った『病牀六尺』に関連)

・最後に、これまで用いてきた「内部」と「外部」、「上半身」と「下半身」といった対立構造により「他人の足」の読解を深めてきたことを確認したうえで、それだけでは説明のつかない事柄について考えることこそが文学の面白さであると話した。例えば、くり返し登場してきた「自殺未遂の少年」は後半から登場しなくなるが、結局どうなったのだろうか？ 予習プリントでも多かつた疑問点であるが「学生」はなぜ突然治ったのか？ 読書案内も兼ね、大江健三郎『個人的な体験』の終盤、主人公の子供の病気が突然治るといふ結末に関して多くの批評家が反発し、特に大江と江藤淳とのあいだで論争があつたことに軽く触れた。

4・反省と今後の展望

以上、「他人の足」を用いた教科横断型授業の実践について述べてきた。本実践後、前田圭介と反省を行った。そのうち主だった点について述べておく。

まずは本実践の意義として、現代文の授業の全体の流れのなかに、倫理の授業を取り入れられたことがある。筆者が現代文という教科の枠組みで説明し、それとは別個に前田圭介が倫理という教科の枠組みのなかで説明するのではなく、筆者の作品の読み方を前田圭介が別の視点から捉え直し、深めることができた。生徒に対しても教科を横断して一つの文学作品を読み解いていく意義が伝わったと思う。

また、「他人の足」を教材として扱ったことは、大きな意味があった。確かに教科書的な作品ではないものの、生徒にとって大きなインパクトのある作品であり、文学を通じて社会問題を考える意義、文学の面白さ・奥深さを感じられたと思う。

一方で反省点も多い。まずは長期的な目標のすり合わせや共有ができなかったことである。本実践はあくまで「他人の足」を理解するという目標にとどまってしまった。例えば二学期の現代文のすべての授業を太宰治『斜陽』に費やしており、予習プリントをみるかぎり、生徒は『斜陽』で得られた読解力を「他人の足」に活かしていたようだが、倫理の観点からも『斜陽』と「他人の足」に結びつけられるような工夫をすれば、より効果が高まっただろう。

また、二人の教員が一つの教材を扱うことの意義をより生徒にわかりやすく示すべきであった。例えば筆者と前田圭介の二人が教壇の左右に座り、特定の場面について、それぞれの観点から説明・議論するといった対談形式の授業が考えられるだろう。生徒の質問に対し、それぞれの専門性を活かした回答を示せば、複雑な事象に対し多角的なアプローチを試みることで理解が深まる、という本実践の意義を強く感じてもらえたはずであるし、生徒の主體的な読

みを促すことにもなつたはずだ。三学期すべての授業を本実践に絡める計画であつたから、時間的余裕があると考えていたのだが、短縮授業だつたこともあり、十分に本実践の特性を活かせなかつたのは大きな反省である。

今後の展望として、これらの反省点を踏まえ、よりよい授業を模索していくのはもちろんだが、さらに他教科へと越境していける可能性も浮かびあがつた。例えば、作中で度々意識される身体性については、体育科との架橋が可能だろう。また生徒のなかにはこの作品を「気持ち悪い」と感じる者もいた。では「気持ち悪い」とはどのような感覚なのか？ この点に関しては、芸術科の観点から深めることができるだろう。唯一の問題は、このような実践を提案できる相手がいるのか、ということに尽きる。もし本稿を読み、教科横断型授業について興味をもつてくださる方がいれば、是非お声がけいただきたい。

以上、本稿では授業実践を通じ、文学を教育で扱う意義、特に評論と文学の相互的理解が生徒の視野を広げることを示し、また新たな形の授業により、生徒に新鮮な学びをもたらす可能性について述べてきた。「文学は教育に不要である」……そのラベルはすでに無用のものとなつていくことだろう。

最後になるが、前田圭介氏（現在、松本秀峰中等教育学校教諭）は本授業実践にあたり重要な提言をして下さり、また本稿の執筆に際してもご助力を賜つた。（2・授業計画とその目的・意図）および（3・授業実践）における【④について】の項は氏に執筆を依頼し、全体の構成、それぞれの表現についてアドバイスをいただいた。厚く感謝申し上げます。

※主な教材・参考文献

- 柄谷行人「病という意味」(『日本近代文学の起源 原本』、講談社、二〇〇九年)
- 大江健三郎「他人の足」(『死者の奢り・飼育』、新潮社、一九五九年発行、二〇一三年改版)
- 石川巧「カリエスの垂直間——大江健三郎「他人の足」論——」(『山口国文』第十七号、六〇―七三頁、一九九四年)
- 正岡子規『病牀六尺』(岩波書店、一九八四年)
- 岸政彦『断片的なものの社会学』(朝日出版社、二〇一五年)
- 伊藤亜紗『手の倫理』(講談社、二〇二〇年)